二、上海へ

聶耳が生まれ育った中国西南の地、雲南省の昆明から上海に出て来たのは一九三〇年の七月である。十八歳だった。聶耳の兄、聶子明・聶叔倫が書いた回想録によれば、彼は正義感が強い子供だった。一九二七年七月に軍閥同士の争いの末によって火藥庫で数千人が死傷する悲惨な事故があり、聶耳は監視監視を求める運動に積極的に参加した。そのため軍閥政府からマークされた逮捕の危険に遭遇した。逮捕が即、長期の拘留や死につながる圧政時代のことである。たまたま二番目の兄にたばこ銭が知られた上海支店勤務の話があり、代わりに聶耳が難を避けるため行こうことになった。上海といえば外国にもよく知られた都市である。めざましい経済発展が伝えられる中国にあって、そのシンボル都市としてのイメージが見えている。いまもっとも手軽に行ける外国として老若を問わず観光客の人が集め、若
では聴耳が昆明から出てきた頃の上海はどのような状態であったろうか？聴耳は昆明から鉄道でベトナムに抜け、香港を経由して上海にやって来た。辺境の小都市出身の聴耳は、黄浦江沿いのバンド（外灘）に立ち並ぶ高層建築群や、市内の大きなビル、大型映画館を見て度肝を抜かれたのではないか。しかし実はその多くが二〇年代後半から三〇年代に建てられたものである。

聴耳が上海に到着した時の様子は、一九五〇年に建国十周年を記念して製作された映画『聴耳』の冒頭部分に出て来る。ただバンドのビル群は映し出しておらず、雑然とした波止場が描かれているだけである。

中国革命の出発点ともいうべき一九一九年の「五四運動」。これは第一次世界大戦の戦後処理をめぐって開催されたペルサイユ講和会議で日本の山東利権を承認した民囯政府の態度を不満として起こったものである。これが全国的な運動に発展し、二〇年代後半から三〇年代にかけて中国共産党の誕生を促す。

これより先に孫文は一九一四年に中華革命党（のちに中国国民党と改称）を組織、一九二一年には南の広州に新政府を打ち立てた。ロシア革命の成功に力づけられた彼は、一四年に中国共産党を受け入れ、『連合共産・労働援助』の新政策を打ち出した。ここに国民党と共産党の第一次合作が成立した。しかし日本をはじめ列強の勢力にかかったこと四十年、革命なおいままだ成功せず、同志は継続努力し、目的を貫徹されよとの遺言を残して北京で死去する。

同年五月、上海の日本人が経営する紡績工場でストライキが行われ、日本、英国、さらに軍閥の警察が弾圧を加え死者が出て、いわゆる「五三事件」が発生する。この事件をきっかけに中国の反帝国主義運動は大きく盛り上がる。広東省に拠る国民党は七月に国民政府の成立を宣言し、国民革命軍を組織した。翌二六年七月、蔣介石を総司令官と
する国民革命軍は、帝国主義諸国と結んだ北方の軍閥打倒と中国の統一をめざして広州から北伐を開始する。民衆に支
持された国民革命軍はわずか半年で长江流域に達し、翌二七年春には上海、南京をも陥れた。
しかし北伐が進むにつれて労働者や農民の意識が高まり、共産党をふくむ左派勢力が力を増していった。
共産党の勢力や国内の右派勢力は、恐れをいだきはじめる。蔣介石はもとより上海の金融資本を中心に浙江財閥と結びつきを
強めていたので、左派勢力の進出には神経を尖らせていた。
蔣介石は二七年四月に共産党を弾圧して、労働者の大衆殺害を実行した。これが武漢にあった国民政府の指揮を受けると、
南後に別に国民政府を樹立する。蒋介石は北伐を続け、翌
二八年五月には日本政府の支持を受けている東北軍閥の張作霖を北京から追い出し、中国の統一を完成した。
しかし以後の国民党中央はソ連と断交し、英、米と結ぶ一方、国内では地方軍閥と協力したので、政治の腐敗や社会
に反発的な左翼勢力が勢力を増大し、関東軍の土地改革を進めながら、江西省を中心に勢力を伸ばし、三一年十一月には瑞金に
毛沢東を主席とする中国共産党中央政府を樹立した。蒋介石はこれと闘いに全力を傾け、激しい内戦が続いて
いた。
上海では民族主義的な抵抗運動が高まってきた。聶耳が昆明から出てくる四ヶ月前の一九三〇年三月に中国共産党の
指導により左翼作家連盟が誕生している。以後、中国左翼劇作家連盟、社会科学者連盟、美術家連盟などの文化団体が
相次いで組織化される。これら団体の中心人物は、夏衍、沈西苓、田漢であり、いずれも日本への留学経験をもっていた。
同年十一月のソビエト革命記念日に、これら文化団体の連合組織として結成された日本文化界総同盟による大規模な集会やデモは不可能になった。そこで運動家たちが集まるところでアディビズの下で聶耳らが活動し、夜間には建物の壁にピアノを張りつけるなどゲリラ戦法を展開
した。聶耳もこうした運動に心が引かれた。しかし仕事に追われ、それどころではなかった。聶耳に寄せる思いを聶耳
三、上海時代・前期

このした時代の中で、聴耳は上海で新生活のスタートを切った。勤務したたばこ卸商の「雲裳申莊」はバンドがある蘇州河の南側ではなく日本租界があった北側虹口の公平路に面していた。二〇〇〇二年夏、筆者が訪れた時、建物は普通の民家として使用されていた。周辺は古い町並みがブラタナスの並木ともに残されているが、いずれ再開発が進み、これ駆けずり回り、帳簿をかつな追われていたようだ。

映画「聴耳」では聴耳の友だちだった趙丹が、撮影当時、四十歳を優に超えていたが若い聴耳役を演じ、聴耳は住み込み店員として当初は無給。一ヶ月が経過してからは毎月十五元をもらえることになったが、生活はぎりぎりだった。こうした生活の中でも好きなバイオリニの独習は続けていたし、英語と日本語の勉強を続けていたから驚く。その日の暮れ、同郷の友人の紹介で中国共産党が指導する大衆組織「反帝大同盟」に参加
この撮影結果に映画会社「聯華映業公司」付属の音楽歌舞学校が練習生を募集している。こうして続けているバイオンが身を助けた。日頃の精進のたまものであろう。音楽好きの聴耳にとって難題もない職場であった。

この歌舞学校はもともと明月歌劇社といい、童謡作曲家として知られる林錦鎂が結成した劇団であった。林錦鎂は聴耳と思われる伝記においても退廃的な音楽を広めたとして評価が芳しくないが、『中國近現代音樂家傳』によれば、彼は聴耳が革命闘争で亡くなった烈士の遺児を引き取り、自分が設立した明月歌舞団で育てるなど面倒見がよく、大勢のスタッフを抱えられている。聴耳が出入した当時、もとの明月歌劇社が上海聯華映業（映画会社）と司機して付属学校となったが、未詳であるが、同様の体験があり、伝記が話せることができるほどだった。

この提携にはこんな背景がある。上海は中国における映画の発祥の地であるが、二〇年代になるに従い、民族資本による明星、大中華、天一などの映画会社が次々と設立された。当初は無声映画であり、俳優は演技さえできればよかった。しかし俳優を生産するための俳優教育をしっかりとしたので、明月歌劇社
は俳優養成所としての役割を担うようになっていた。明月歌劇社のあった愛文義路二九号は現在の北京西路二九号でレンガ造り二階建ての建物が現存している。

翌三年九月十八日夜、日本の関東軍が奉天（現在の瀋陽）北郊の柳条湖で南満州鉄道の線路を爆破する謀略事件を行ったが、守備隊はそれを隠し、あたかも中国の東北辺防隊が仕掛けたように見せかけ、逆に辺防隊の陣地がある北爾中佐らが策定したものである。関東軍としてはとても大き戦線を拡大する口実が欲しかった。これらはすべて関東軍作戦参謀の石原莞爾が計画した。「中略」・職場での食事の時、皆がこのことについて話題にした。彼らの議論はつまるところ国家主義的な考えに基づいており、いまの日本は南満州鉄道を破壊、東北軍を占領する計画を立てている。この国際的な情勢を обеспえたのは、日本の武力占領そのものに留まらず、国民主政府が不拡大方針をとることを期待したからで、日本の軍事行動は、錦州無差別攻撃、黒竜江進撃と拡大し、国際的な「公理の裁決を待つ」方針は破綻してしまった。
こうした時期であったが、聴耳はこの頃イタリアの個人教授プロデューサーについてパイオリンを学んでいた。学費は高く、その捻出にはいつも苦労しなければならなかった。

「満州事変」後、日本側では中国側が後退に後退を重ねたことに気をとることが、また世界の目を東北部からそらすため、聴三事一月に上海で日本人僧侶襲撃事件を演出し、居留民保護の名目で三千人に近い陸戦隊を共同租界に上陸させた。さらに一月末には一方的に租界外に部隊を展開し、警備していた中国側と衝突し、戦火の火ぶたが切られた。

上海に駐屯していて抗日意識の高かった十九路軍の兵士たちは、蔣介石による上海撤退命令を拒否し、上海市民ともに抵抗に立ち上がった。戦火に家を焼かれ逃げ惑う同胞の姿を目の当たりにして、聴耳は自らの進むべき道について考え、必要な集団指導体制をたて、独力で指導を務めた。その結果、聴耳は中国左翼演劇家連盟の責任者である田漢とは、映画会社を運営するための役割を果たし、1933年に「中国左翼映画作曲集」を発表した。
すでに名を成していた大物文化人であった。聴耳にとってこの田漢との出会いこそ、彼の運命を決定付ける。のちに
数多くの田漢作品、聴耳作曲の歌曲が人気を博すことになる。国歌となった映画「風雲児女」（風の中の若者たち）の
主題歌「義勇軍進行曲」もそのうちのひとつである。
聴耳は大好きな音楽を仕事とすることができ、当初は喜んでいたが、次第に歌劇社での仕事に疑問をいだくようにな
る。黎錦暦がペンネームで発表し大流行した「毛毛雨」（こぬか雨）「妹妹我愛你」（われ君を愛す）「愛神的節（キューア・マルセリーズ）を歌い大きな拍手に包まれる場面がある。これには聴耳の日記に記された気持ちを表現したものだ
ろう。
この頃、中国左翼演劇家連盟が評論活動を重視する方針を打ち出したことから、聴耳はペンネームで新聞雑誌に評論
を強く批判した。その内容は、黎錦暦の作品は反封建的な要素があり、貧富の格差という階級矛盾を描いていないこと
を認めながら、しかしいま民族の危機存亡の時、あまりに彼の作品は「歌舞のための歌舞」になっているのではないか。
興行成績を求めるために市民層に程度の低い音楽を押し付け、青少年に有害な音楽を提供していると難じた。
我々の必要としているのは、軟らかな豆腐ではなく、命をかけて闘う筋金入りの魂なのだ」と主張し、二十歳ほど
も年上の黎錦暦に対し、大衆の中に入れば、あなたは新鮮な題材を得、新鮮な芸術を創造するだろう。さあ努力だ。
それが時代の道というものだ。と、気炎を吐いている。

明月歌劇社の中では最初「黒天使」と呼ばれていたのが、結局聾聾耳は停職処分を受け明月歌劇社にいられなくなりました。二度目の失業である。

聾聾耳が船に乗り上海を離れ、天津で出発して八月一日に北平（現在の北京）に到着した。聾聾耳は当時同郷の友人たちと同県、北海、郊外の顧和園、香山などの名勝旧跡に遊びに行ったりました。またしばしば下町の天橋という繁華街に行き演芸を見たりしています。

九月中旬から上海左翼演劇家連盟の紹介により、北平左翼演劇家連盟の機関誌「演劇新聞」に「上海の映画界について」の原稿を出した。また、北平左翼演劇家連盟や左翼音楽家連盟関連の公演や組織建設活動に参加するようになった。北平左翼演劇家連盟のメンバーとしてのチャリティーショーに参加し、「インターナショナル」をバイオリンで独奏した。

北京ではかねてから憧れていた国立北京大芸術学院を受験したが不合格だった。伝記作者は、読者に課題だった。「国民党的党義について」、聾聾耳が出題者の期待に応える要領の良さを持っていなかったため落第したと記している。

一方でバイオリンの練習意欲は衰えることなく、北京滞在の間にロシア人トーノフを訪れ、個人レッスンを受けた。しかし長い間仕事に置いていなかったので、すぐに学費が払えなくなってしまいました。これ以上の滞在は無理と判断し、寒さが本格的になる前の十一月八日に、汽車で上海に帰った。北京滞在は三ヶ月であったが、北平左翼演劇家連盟メンバーとの交流を通じて、聾聾耳はこの間に思想的に大きな成長をしたといわれる。
四、上海時代・後期

上海に戻った聴耳は、友人たちの世話により明月歌舞劇社がかつて所属していた映画会社、聯華影業公司に入社した。最初の仕事は年末映画『除夕』（除夕）の記録担当だった。その後映画音楽の仕事にまわり、創作・評論活動に本格的に携われるようになった。

『映画はあらゆる芸術の中でもっとも重要だ』というレーニンの言葉はよく知られているが、中國共産党の映画指導グループは、映画の影響力に注目して進歩的映画の制作に取り組み、これはという人物を送り込んでいたのである。

一九三三年の年初、聴耳は田漢を紹介人に、夏衍の立ち会いのもと中国共産党に入払した。またこの春、田漢の紹介で党が指導する大衆組織「ソ連の友社音楽グループ」に参加する。このグループはメンバーこそ少ないが、呂驚、張曙、任光、安娥などがあり、なかなかがっちりした陣容だったという。

この頃、革命音楽の発展を図るために任光らと相談して『中國新興音楽研究会』を組織した。立派なピアノがある任光の家で革命音楽の創作について一緒に研究をした。

『中国の新興音楽とは何か、これについて聴耳は、『音楽などの芸術は詩、小説、演劇と同じように大衆に代わって叫び続けるものでなければならな』。大衆は必ず音楽の新しい内容と演奏を求め、作曲家の新たな態度を求めるようにさわるにちがいない』。旧時代の作曲家たちは革命前に確立した方法をそのままにして作曲を続けていた。一方、革命が生み出した新時代の音楽家たちは、生活と芸術に対する異なった態度にもとづいて生命を注ぎ込んでいく。
選ばれた。

聴華映画の題名には、自社の映画に「その他大勢」の役で必要な時に出演する規定があった。このためこの頃、聴華映画の製作担当のほか俳優の歌唱指導に当たる。

三月二十一日、聴華映画公司一発の音楽係主任となり、映画の配音担当のほか俳優の歌唱指導に当たる。

楽家父娘の物語だが、聴耳は舞台となる南洋の黒人鉄匠の役を買って出て。五月下旬にロケで杭州に行く。映画は音楽家父娘の物語が、本書のテーマに見えるとき、あのたちは風にあたって涙をとる。

わしらが汗流すとき、あのたちは風にあたって涙をとる。わしらが腹をでエッかいに、あのたちは不幸しいものを腹いっぱい

わしらは年中お日様も見えないのである。

この頃、聴耳は民間音楽を革命音楽に何とか取り入れられたかと考えていたよう。身を絵の具で真っ黒に塗り、みごとに群衆役を演じた。聴耳は田中作詞の挿入曲「開錐歌」の作曲を担当した。これが田中との最初のコンビ作品となった。

力強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつと強くはらつと強くはらつと強くはらつと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつと強くはらつと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強くはらつくと強い

九月十九日、映画『漁光曲』の配音を担当するようになったが、監督蔡楚生らにしたがい、浙江省の石浦にロケに行く。
このロケの期間中、聴耳はそれまでの過労が重なって病気になってしまい、一時より早く上海に戻って二月間の休養を余儀なくされた。

同じ秋、左翼劇連組織の上演した一幕劇「飢餓迫迫之歌」（飢餓交迫の歌）を制作。さらに新聞売車の少女との出会いから発想した児童歌「売車歌」（新聞売りの歌）を作曲した。「ラララ！私は小さな新聞売りよ…」で始まる軽快で明るい調べは、いま子供たちによく歌われている。

十一月、上海の映画界を震撼させる大きな事件が起きた。国民党蔣介石政府は共産党支配地区の左翼の文芸運動に対して包囲作戦を展開していた。この作戦の一環として、十二日、国民党的暴徒三十四名が、田漢と関係が深い芸術影業公司的撮影所に乗り込み、各映画会社、映画館は荒子布で夏のビキを撒いたのである。

芸術影業公司が襲撃された後、製作会社だけでなく映画館へも警告文が送られた。このような状況の中で聴耳は積極的に左翼文芸活動に参加し、権力側との闘争を続けたので、聴耳影業公司は彼の解雇を考えた。聴耳はしばらく前、過労のため倒れたことから休養しろという名目で翌年一月二十四日、彼を解雇した。

聴耳は党の幹旋で、同年四月、百代唱片（レコード）公司に入り、任光とともに音楽部の責任者となって進歩的歌唱を推進した。
の制作に携わった。百代唱片会社は中国でもっとも早く営業を開始したフランス資本のレコード会社である。発足当初は、中国の伝統音楽などを録音し、人気を集めたが、三〇年代に入り、当時としては最高の録音技術と設備を備えた会社として様々な作品を世に送った。この会社は外国資本のため、国民党政府の干渉が及ばず、聴衆たちは映画音楽あるいは流行歌曲という名目で革命歌曲を多く録音、レコード化することができたのである。

この頃、中国左翼作家聯盟音楽小組が成立した。聴衆のほか、張曄、任光、呂驄、安依など青年音楽家、作詞家が集まり、聴衆が責任者に選ばれた。

五〇年代の陣営に伝承する民間音楽「金蛇狂舞」、翠湖春曉」などの民族器楽が演奏され、大いに好評を博した。そして、聴衆の贅しき家に生まれた双子の姉弟を主人公に、懐かしき人々と社会の不合理を描く。「通名の主題歌は任光の作曲によるもので、収録のテーマを引き立てる。映画のテーマを歌うため、発売された長いヒットとなった。

中国の民族器楽の合奏を演出させたために、聴衆を指導グループは五月、百代国楽隊を作った。映画会で何度か彼のアレンジした音楽に伝承する民族音楽「金蛇狂舞」、翠湖春曉」などの民族器楽が演奏され、大いに好評を博した。その後、耳聴は百代唱片会社からレコード化され発売された。

五月から六月まで東南アジアの紹介記録映画『南洋大観』、および『漁光曲』の音楽を担当した。映画『漁光曲』、『蔡打ちの歌』、碼頭工人歌（波場労働者の歌）、苦力歌（クーリーの歌）の演出を担当し、劇中歌『打礦歌』、『レンガ造りの歌』『打柴油の歌』（く}

この劇の主役、波場で働く労働者「周宗人を演じている。この劇は彼らの過酷な労働と悲惨な生活、まさに清末に高杉晋作が見たもの、半植民地上海の状況を劇化したものである。聴衆は労働者たちが重い麻袋や大きな木箱を背負っ
わり、「エイヤーホー」『エイヤーホー』とあえぎながら運ぶ様子を実地に調べ、彼らの叫び声を曲に取り入れ、貧困にめげず力強く生きるエネルギーを表現しようとした。躍動するセリフと歌で織りなされた新しい表現方式で人々の注目をあび、大好評を博した。

国民の弾圧に反撃するため、党の映画グループは互いに協力して左翼文芸運動の新拠点として新たに映画会社「海電通映画公司」を創設した。七月、聴耳はこの会社の最初の作品『桃李劫』（教え子の不運）に出演した。聴耳は希望に燃えて建築学院を出た青年で、正義感が強い彼は社会の不正義を痛烈に批判する人の声を強く歌い上げ、また青年が官憲に捕らわれて以後は、足かせの音、銃声などサウンド効果を意識して使った「聴耳伝」は、この曲への高い評価をしている韓立文と聴耳の歌はわが国の広範な大衆の革命的な熱情と闘志を奮い起こさせ、数々の青年たちが抗日の前線に赴き、祖国のたれみを学んでいた。

聴耳の歌曲は鮮やかに音楽的表現をした時代感に富んでおり、人民の心の声を反映し、前進する時代の歩みを体現している。聴耳はこの頃、友人賀緑汀の紹介で、翌年の出国前夜までずっと国立音楽のロシア人教授オクサロフについてピアノと作曲理論を学んでいた。

八月から九月まで聯華影業公司二号が撮影した映画「大路」（大いなる道）（聴耳監督）の主題歌「大路歌」（聴耳作詞）と挿入歌「開路先鋒」（孫師毅作詞）を作曲した。この映画は軍需物資を運ぶ道路建設に従事する若者たちの物語で、多くの労働者が一にローラーを手に彼らの生活を体験して作曲した。掛け声などを多用し、重労働を表現しながら
開路先鋒」などのレコードを放送し、進歩的歌謡の宣伝とその拡大に努め、いわゆる退廃的な音楽に対抗した。同じ頃、芸華影業公司の映画「飛花村」のために主題歌「飛花歌」と挿入曲「牧羊女」を作曲した。これをアメリカによる製作費の一部として支払うことを約束した。しかし、百代公司のマネージャーから責任を追及され、十一月末、百代公司を退職することになる。

一九三五年一月、聯華影業公司二階の音楽主任に迎えられる。以前クビになったのは一階で二階の組織になっていた。「新女性」は大都市の上海で音楽教師の傍ら女流作家をめざす主人公を次々と苦難が襲う物語である。脚本と歌詞を書いた孫師毅は、ストーリーを一女性の悲劇に終わらせず、当時の多くの女性たちが置かれていた状況を明らかにすべく最終の場面で、胸を張って紡績工場に赴き、彼女たちの労働や生活を観察し、新しい女性が、それは生産に生きる女性、新しい女性、それは社会の労働者をとっって紡績工場に赴き、彼女たちの労働や生活を観察し、それを生産に生きる女性、新しい女性、それは社会の労働者をとっって紡績工場に赴き、彼女たちの労働や生活を観察し、}

140
たくましさを表現しようとした。
清新の気持ちにここの組曲をささげた、このため、聴耳はアマチュア合唱団の必要性を痛感し、団員が増えないか試験などする
べて一人でやって、「聴覚音楽団」を組織した。映画は人気女優、院環玉の役にままり込んだ演技により好評だった。
が院環玉自身の恋愛をティッシュ新聞のエサにされ、意地惡い非難中傷をあびた彼女は、三月八日の国際婦人デーを選ん
で自殺してしまった。それ以来に何もの群発が参加し、映画のヒットが同じように時代の犠牲になった彼女を悼
んだ。
一月、田漢の書いた三幕もの新劇「回春之曲」のため、「告別南洋」（さようなら南洋）、「梅娘曲」など四つの揮
入曲を作った。
一月三十一日から二月二日まで、左翼作家同盟が「上海舞台協会」の名義で組織した盛り上の演劇公演に参加する。
動耳は「回春之曲」の中で歌う歌曲を俳優たちに指導したほか、上演時にはさらに舞台の横で六弦琴を弾き、あわせてオー
ケストラを指揮して歌唱者のために伴奏した。
二月、芸術工芸サポートの撮影した映画「逃亡」のために、主題歌「逃亡曲」（この「自衛歌」と改名）、揮入曲「塞外村
女」を作った。また会社が新たにクラシックした映画「凱歌」の主題歌「打長江」と揮入曲「採菱歌」を作曲した。
「桃李劫」（教え子の不運）で成功を収めた新しい映画会社、電通映画公司は三四五年に引き続き田漢に抗議と救国
をテーマにした映画シナリオの執筆を依頼した。これが日本軍の占領を逃れ、東北から上海に流れ着いた二人の大学卒
業生が、民族存亡の危機に際し、一人は勇敢に、一人は逃にながらも最後は万里の長城付近の前線での戦いに向かうさ
を描いた「風雲児女」（嵐の中の若者たち）である。当時国民党当局の政治弾圧は日増しに激しくなり、二月中旬に
田漢は阎翰笙ら党組織に属する作家とともに逮捕されていた。そのため映画の台本に上上げたのは夏衍である。主題歌の作曲が
求められているという話を聞いた聴耳は、すぐに夏
駅を訪ね自分から申し出てこの作曲をやらせてもらった。祖国存亡の危機に際しているにもかかわらず、無抵抗を決め込む国民党に怒りを感じていた聳耳は、その思いを表現すべく文字通り食事を忘れんで作曲に取り組んだ。ニッペ尼来模想をねり、田漢作詞の主題歌「義勇軍進行曲」を作曲した。さらに監督の許幸之に乞われて彼の作詞による挿入曲「鐵蹄下歌女」（戦場の歌姫）を完成させた。

この「義勇軍進行曲」は抗日戦争のみならず、その後の国民党との内戦「解放戦争」を通じて現実は正式国歌として憲法にも明記されている。

映画「桃李劫」（教え子の不運、「大路」、「新女性」）が相次いで上映される聳耳の歌は急速に民衆の間に広まり、国民党政府は彼の作曲活動に対しわけに難しく神経を失う始末された。それだけ彼の音楽の影響力が強く、彼が日本を経て欧州に行き、ソ連で学べるよう支援し、手紙を書かれた。聳耳はこの機会を利用して音楽の道を究めたことにした。当時、組織は相次ぐ弾圧で壊滅的な状態に置かれていたのだろうが、聳耳は周囲の友人には日本の大阪へ行き、牛皮の商売をしている三番目の兄を手伝うと説明していた。この時、兄はすでに昆明に戻っていたのだが、そう言いつくった。

四月十五日、聳耳は上海の堤頭から日本郵船の定期船「長崎丸」に乗船し日本に向かった。
五、終わりに

その日本は、軍部が益々台頭して戦争拡大への道にまっくしろに進んでいた。美濃部進吉東京帝国大学教授の天皇機関
説が貴族院で攻撃され、衆議院では国体明徳決議案が満場一致で可決された。陸軍内部の対立から真崎甚三郎教育総監が罷免され、八月十一日には永田鉄山軍務局長が斬殺され、翌年の二・六事件へと血生臭い事件が続く。

一方の中華は、国民党の弾圧にもかかわらず民衆の抗日の動きはますます活発になり、八月一日に中国共産党は「抗日救国のために全同胞に告げる書、いわゆる「八・一宣言」を出し、「すべての者が内戦を停止し、すべての国力を集め抗日救国のための神聖なる事業に奮闘すべき」と呼びかけた。義勇軍進行曲」をはじめ聴く耳の歌曲は、その頃から盛んになってきた。聴く耳は日本軍主義との戦いを鼓舞する歌曲を次々に作曲し、強い支持を受ける。ではその歌曲の力強さはどこから生まれたのか。彼は優れた資質をもった青年青年ではあったが、作曲という極めて専門的な知識・技術が必要とされる分野で正規の教育を受けてこなかった。古今東西、専門教育を受けていない著名な作曲家がいるかどうかは勿論にして知道を試みたが失敗した。これはすでに書いたとおりである。

しかし彼には、人々がいままでに必要としている歌曲を作りたいという強い思いがあった。貧しかった少年時代の日々、母の故郷でみた差別される少数民族、学生時代、恩師が刑場に引かれゆく様子、それらが走馬灯となって記憶にしよめられる。聴く耳は三〇年代の上海で、日本という敵、蒋介石という反革命勢力を前にして、どう戦うか、その思いにようがえる。聴く耳は三〇年代の上海で、日本という敵、蔣介石という反革命勢力を前にして、どう戦うか、その思いにようがえる。
注釈および引用

1）回憶我们的四弟聶耳『人民音樂』一九五五年十月号
2）聶耳全集編集委員会編『聶耳全集』下巻文化芸術出版社・人民音楽出版社
3）向達三编「兒童歌舞劇的創作」作曲家黎錦鷗・中國芸術研究院音楽研究所編「中國近現代音樂家伝」春風文芸出版社
4）一九四六年・一九五一年・一九四七・一九四九・一九五四・一九五二・一九五三
5）正しい標準語が話せることが俳優の収録条件になってきた状況について、樋口泰子『楽人的都上海』（研究出版
6）『人民中國』一九五九年十月号
7）田漢『人民音楽家聶耳を憶』
映画『聴耳』
上海電影制片厂（一九五九年作品）

貴州東方音像出版社

ここに聴耳の伝記についてふれておく。

死去五ヶ月後、一九三五年十二月に東京で
刷された『聴耳紀念集』所収の承箋『聴耳伝記』
がもっとも早いもので要領よくまとめられてい
る。

新中國誕生後、洪邁『聴耳年表初稿』（人
民音楽）（一九五五年八号）がある。その後生
誕七十周年記念、没後五十周年記念などの機会に関係者
による思い出などが書かれ、これらは音楽の技術的な面にも詳しい。

本稿では伝記部分の記述について、向延生の『聴耳年譜』（聴耳全集 下巻
五五〇一五六〇頁）を踏まえてつづく。

もう一つも信頼できるもので、なお中国語からの翻訳は拙訳による。

上海黄浦区の宝昌公園にある聴耳像
（愛国主義教育基地のひとつとして1996年に建設された）